

ぬるのは、外觀は甚だ苦しい様であつても、反つて病氣で苦しんで死ぬ方がつらい事もある。第二種の裏面の方のは、一寸見えないから、吾々の感じが少い。醫者が研究の爲に生きた兔を捕へて之を解剖したり何かすること、之は見えない方の事ですから余り吾々は、ひどく感じない。何れにしても、苦しみの多少、見ゆると見えないとを問はず、動物虐待が吾人の道徳的感情に感ずることの多きは明かである。

(未完)



寄書

保育上の疑點に就て教を請ふ

横田 鏗

凡そ事物は學理實際相待ざる可らず徒に學理のみに馳せて實際に疎ければ坐上の水練に異ならず夫れ幼稚園にて授る所の事も近來は文字の讀み書き等は大學廢せられたるが如し其説を考ふるに幼兒に讀み書き等を授るは頭腦を痛め身体に害ありとするものゝ如し是の雜誌の中にも往々散見せしやに思へり成程六ヶ敷文字の讀み書きを授るは左もあるべし併しながら五六歳以上の幼兒にはかな字等の簡易なるものを授け自然に讀み書きの習慣

を養成するは無益の勞に非ずと考ふ且つ幼稚園にて授くる事は必ずしも何々を其日に覺へしむると限るに非ず其成と成ざるとは責る所に非ずして幼兒の任意にするものなれば唱歌を唱へ遊戯を爲すと一般なり扱て深遠なる學理や西洋の事實はいざ知らず東洋は自から東洋の氣風もあり其間多少の斟酌なかる可らず從來の經驗に徴すれば一体に幼兒は其智慧の發達に逆れ兎角に物事を覺へんと欲する傾きありて譬へば二三歳の幼兒にても一度物の名稱等を實物に就き言聞しむれば自然に記憶し他日偶然其物に觸目する時は忽ち其名を呼び親をして記憶のよさに驚かしむることあり是等は一般に兒子を持てる親にして意を留めたる人は然るを知るゝならん學者の子は學事に敏く商家の子は商事に賢きが如く何れの家庭にても讀み書きは最も

重きを置く所のものなれば自然に其習慣を受けて讀み書きを好むの傾あり在園者中にも已れの氏名等は既に書き得る者さへ見受ることあり是等の點より見れば年齢に依りては必ずしも文字の讀み書き等を排斥するの理を認ざるやに私考するなり且つ教育の話等も唯單に卑近なる一口嚙の如きものゝみにては耳を傾げざるが如し亦唱歌に至りては自から徳性を涵養すべきものと思へば其辭の優美にして多少文句の上にも章をつくるの必要あり縱令一二幼兒に解し兼る文句ありとも之を幼兒に責め其意味の解説を求む可きものに非れば決して幼兒の苦痛を感じるの理由なし毎日一回二回と唱へしむる内に自然に意味の何の邊にあるやは悟り得るに至る可し唯解し易さ一邊のみにて無趣味殺風景に且つ荒蕩無稽なる事柄等は避くべきもの

と信するなり一体詩や歌にても其意味の露骨なるを善とするに非ず其意味の隱微なる所に神韻の感遠なるありて以心傳心もて人を感し鬼神をも泣し

ひるに至るなり何と唯り唱歌に於て然らざらんや以上述來たる所の私見は其概略にして然も時流に逆ふの嫌ひありて恐くば大方諸氏の笑を招かんと幾度か躊躇せしも退て思ふに是れ斯道に忠なる所以に非すと且つ古言にも疑しきは問んことを思ふとわれは聊か是の疑點を擧て大方の教を請ふ

備後の毬歌

備後 佐藤 龜 一

●べにやのおかざの。うめものは。むつてもむつても。ようそまる。とんばにみづひき。みづくる

ま。みづがないとておえとまで。おえとながさき。こしかけて。こどもつさんこどもつさん、こゝはなんちうところかへ。こゝはしなのゝ。せんこうじ。うめとさくらをわけまして。うめはすいすい。もとされて。さくらはさいさい。ほめられた。

●あんなこともしうと。こんなこともしうと。いせへまいるいふて。いせのこみぞで。いかをひるうて。やいてかながらかふて。たなべふちやけて。ねこがとてくて。ねこをばふいふて。あちのはしらで。あたまこつこつ。なわまいだ、なわまいだ。

我が地方の毬歌

相模 平 岩 繁 治

五つ六に、七八九十や、十二三十四の、れてまんなさむろく、おかしはしろかね、きよ——ろくる